

---

# 不良

夢野ユーマ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不良

### 【Zコード】

N67090

### 【作者名】

夢野ユーマ

### 【あらすじ】

名門私立高の落ちこぼれ生徒と、予備校のアラサー頑固者先生。一人の不思議な絆。

## 出会い

飲み干したコーヒーを力ヤンとソーサーに置いた。名古屋の千種。高級「コーヒーショップ」、ボワドヴァンサンヌ。一杯は525円。「一杯めは260円。いつも一杯飲む。マイルドなブレンドとストロングなブレンド。一杯ずつ。小さいグラスのお水を飲む。そうすると店員さんがおかわりを持っててくれる。ファーストフードの店と違い、本当に一流の豆を使っているので、私はミルクを使わないし、ケーキやサンドイッチも頼まない。スプーン一杯の砂糖だけで飲む。アロマを楽しむ。

私がカップをソーサーに置いた時、後ろの席の高校生が紙幣を数え終えて、封筒に入れた。「よし、ちゃんとあるな」私はその高校生の手首をつかんだ。金髪でパーマをかけている。意外とあどけない顔をしている。

「な、何するんですか?」

「速水くん、恐喝の現行犯ですよ」

速水は封筒を私の生徒、佳彦の胸に投げつけた。

「せめて学校のセンターに言えよ!...予備校のセンターに言なよ!...」

佳彦は封筒を慌てて学生カバンにしまった。私は速水の手首をはなさなかった。

「佳彦にも過失があるかも知れないけど、君もいいところのボンボンでしょ。こんなトラブルで終わりたくないでしょ。手を引きなさい」「分かったよ!...どうすりやいいんだよ!」

「佳彦が不法にダウンロードしたデータはここで全て消去する。そ

の代わり、君も何も要求しない。それでビックリですか？」

「はいはい、分かりました。分かつたんで、手をはなして下せーーー。」

私は速水の手首を解放した。

話は昨日こさかのぼる。

私は名古屋の千種から今池にかけての予備校林立（乱立？）地帯のある予備校で働いている。

講師控え室に聖イグナチウス学院の一年生の野上佳彦が入ってきた。中一から、ずっとめんどうをみている子だ。

佳彦は涙ぐんでいた。

「先生、助けて下さい・・・」

「何？」

「不良にむすられてているんです」

私は国語・小論文（時に応じて英語も）を教えている。しかし、話ののみこみは早くない。

「今池でカツアゲにあつたんですか？」

千種は学生街だが、今池はパチンコ屋などが多く、多少、荒っぽいところである。

「いいえ、あのダウンロードって分かります？」

「分かりません」

私はべもなく答えた。私はパソコン、iPod、アイパッド、コンピュータゲーム機、どれも持っていない。（ケータイは辛うじて

持つていい。）

「あの・・・うちの学校の不良で・・・コンピュータの改造が上手い奴がいてえ、インターネット上でいろんなソフトを買って、データを手に入れるのをダウンロードって言つんです。それを料金を払わず、落とせるように改造する奴がいるんですよ」

「それは犯罪なんですか」

「・・・僕もよく分からんんですけど、魔がさして、ゲームとか着うたとか落としてもらつたんです。そしたら、お金ふっかけられて・・・学校の先生に相談したら、内申に傷がつくと思つ」

「」

私はキヤップをしたボールペンでデスクを一回叩いた。

「黙りなさい。私も考え中です」という意味である。

ダウンロード・・・よくわかんない。しかし、あれか、映画を観ると最近は必ず違法な盗撮がインターネット上にあるとか警告が流れて・・・あの類だろう。

しかし、佳彦もお殿様だから脇が甘くて、困る。

「しかし、聖イグナチウスの不良なんてたいしたやつじゃないでしょう。金山とか行つたら、瞬殺でしょう」

佳彦が声をあげて笑つた。体は小柄で、おつとりした子である。

「笑つている場合じゃありません。どうしたらいいんです？」

「あの・・・データは消すから、お金は払えないって伝えて欲しいんです」

私は非常に迷惑そうな顔はしつつも受け入れた。

「じゃあ、明日、正文館書店一階のボワドヴァンサンヌにその子を呼び出しなさい。私が現場をおさえます」

佳彦はホッとした顔をしていた。

ちなみに書き添えておく。私は33歳。独身。十年以上前の大学でのコンピュータの授業の成績はギリギリ合格だった。

そして、ボワドヴァンサンヌに話は戻つてくる。私は速水と向きあつていた。

「煙草吸つてもいいですか？」

「かまいませんよ」

私は速水を観察した。コーヒーは頼まず、三つのケーキがお皿に載つている。

「コーヒーダメなの？」

「はい、大人ちっくな飲み物は酒だけです。飲むのは」

「君もけつこういいとこの子でしょ。こんなことしてどうするんです？望めばいくらでもおこづかいもらえるでしょ」

その問いかけには速水は顔をそむけた。妙に子供っぽいといふと大人的なところが混在している。

速水はいいことを思いついた顔をするとカバンを開けた。

「見て下さい。これ、手作りの警棒です。パイプ椅子のパイプに石や砂を積めたんです」

パイプにはガムテープが巻いてあつた。私は呆れて、ため息をついた。

「あと、これ、一番大事な宝物の写真です。知り合いの人にももらつた特攻服を着ている写真」

私は急にふわっと速水の世界に引き込まれた。突然に彼の悲しみと私の悲しみが同調したのだ。

この子は傍目には申し分ない境遇に見えるかも知れないが、何か周りにうちとけられないものを持つていて、孤独を感じているのだろう。

そして、私もまた表面上社会に溶け込んでいるように見えて、どこか生きることに居心地の悪さを感じているのだった。

「先生、浅倉悠哉先生ですよね」

「はい、そうですよ」

私の予備校には聖イグナチウスの生徒がたくさん来ているので、否定はしなかつた。しらをきつても仕方がない。

「俺、先生のクラスに入りたいんですけど。佳彦のノート見せてもらつてるんだけど、あいつまとめるの下手くそで」

私は苦笑した。

「それは正しいかもしません」

速水の次の言い種も面白かった。

「先生のカバンの中を見せてくれませんか」

人によつては拒絶するのだが、私は速水にはカバン（典型的な文学部のカバン）の中身を見せてあげた。ノート。ルーズリーフ。原稿用紙。筆記具。

本。黒智英の「現代人の論語」、講談社学術文庫の「全現代語訳大鏡」、穂村弘の歌集三冊。英文法の参考書。などなど。

「クラス受講は事務所に申し込んで下さい」

「へいへい」

速水はケーキをたいらげ、私はコーヒーを飲み、外に出た。

「これ、いいでしょ。ちょっとミーハーだけど

「いいですね」

速水はフュラーリのステッカーを貼つたバイクに乗つて、去つて行つた。

私はハツとして大声で叫んだ。

「はやみー、中島みゆきの『狼になりたい』って曲、知つてる?」

走り去る速水にはとても聞こえないよつて、私、何だかさみしかつた。

## グレートマザー

「美しいですよ。実に数学は美しいですよ。細部まで完璧で・・・」

私は堀江教授と東大・京大クラスの生徒数人と、教室のあるビルの喫茶室で過ごしていった。休憩時間だった。

「浅倉くんなんかはひどい生徒ですよ。ゴールドバッハの予想なんかも分かっていないんだから」

私は苦笑した。

私は受験生の時、堀江教授の著書を読んだ。私立大で数学の教授をやりながら、予備校の先生もやっていた堀江教授。参考書というより、教養にあふれた本。「数の美」

堀江教授は白髪をボウボウに伸ばして、ひげなんかも剃っていない時もある。すでに教授は退官なさっているが、少しも虚飾はなく、ジーパンにシンプルなポロシャツなど身軽でいらした。

山陰地方のご出身で、生徒が聞き取りやすいようNHKのアナウンサーのようにハキハキと大声で標準語でしゃべる。私は吹き出すのをこらえるのに骨が折れた。

私は「数の美」を読んだので、三十三歳の教務主任代行になつても「浅倉くん」であり、「生徒」であり、「F・落第生」である。

「私は光源氏とか在原業平とか世之介とか、そちらの方面ばっかり追求しておりまして、『ゴーラードバッハ』のような高尚な方面は・・・」

私は堀江教授に素晴らしいパスを出した。

堀江教授は大喜びして言った。

「ジュリアン・ソレルスや、ブランシュ・デュボワのことばっかり  
考へていると、こういう人間が製造されます。いいですか。ゴール  
ドバッハの予想とは偶数は二つの素数の和であることを証明できな  
い。いいですか！証明できないということですよ！」

私は一番優秀な鹿野という生徒に微笑みかけた。

「浅倉くん、百を構成している素数を一つ挙げて下さー」

「えつ・・・・21と79

ドッと生徒が笑った。「21は素数じゃない！」と声が上がる。私は焦つて、「23と77」と言い、笑い声が大きくなつた。鹿野が助け舟を出した。

「3と97」  
「いいですね」  
「41と59」  
「それもいい」

私は鹿野にもパスを出した。

「どうして証明出来ないって分かるの？」

「多分・・・素数は大きくなるほど素数であるか証明しにくくなるから」

堀江教授が拍手のジェスチャーをした。鹿野は大学過去問の本（いわゆる赤本）や予備校の模試のプリントを作つても国語の隣のスペースに数学があるとすぐ解いてしまう天才児だった。

一段落すると堀江教授は私といつ落第生に憐れみでバスを出してきた。

（せうやつ）私は堀江教授に学恩を無尽蔵に負つていへらじい。）

「しかし、詩歌というのは俗悪な近代小説と違つて美しいものです」

私は堀江教授好みの歌をいくつか口ずさんだ。

「四極山<sup>しほくさん</sup>ならの下葉を折り敷きて今宵はさ寝む都恋しみ」（九州の四極山、都を遠く離れてならの木の枝や葉をしきつめて眠ろう。都が恋しいので、せめて夢で都を見るのだ）

「じぐれの雨まなくし降れば真木の葉もあらそひかねて色づきこけり」（時雨が絶え間なく降り注ぐと真木の葉も抗うことは出来なくて紅葉してしまった。それと同じでお前さんがひつきりなしに口説

くから娘さんも断りきれなくて、頬を赤く染めているよ）

「秋風の吹きにし日より音羽山みねの梢も色づきにけり」（秋風が吹いた日から音羽山の峰の梢も紅葉したよ。そして秋の恋は実つてお前も顔を赤らめている）

堀江教授は私に遅れて、そつと歌を口ずさんだ。

「詩歌とか恋愛も、なかなか美しくありませんか」

「そりゃあ、美しいです。恋はいい。どんなに醜い女でも一番美しい数の公式より美しい」

堀江教授の決め台詞に生徒がドッと笑った。

アカデミズム漫才が終わって、堀江教授は生徒たちと教室に向かい、私はロビーに向かった。

須賀さんという営業部長が「ああ浅倉先生」とソファから立ち上がり、軽く礼した。私は深々と礼する。どこの私の大の体育会出身の中年のオヤジイだが、須賀さんはなかなかやり手だった。本当の本当の本の腹は分からぬが、講師に礼を忽くす。うちの予備校で

は教材などせこいものは売らない。売るのは良質な講義である。須賀さんはそういう信念を持つているように見える。

私は文学のこと以外はパーソナルクリンであり、須賀さんには上手くマネジメントされているのだが、須賀さんは巧妙に私の自尊心を傷つけない。

「あっ、おみえですよ」

流石の私も度肝を抜かれた。速水もベイビーフェイスのハンサムだったが、速水ママはすごくキレイだった。岩下志麻の若い時のようだった。私は「源氏」の研究者なんだから、服飾のことなんか分かっていないといけないんだけど、着物の種類は分からなかつた。とにかく何百万もある着物に錦の帯で、要所要所は宝石で飾つていた。速水秀助はエムポリオアルマーニの服で、指環をトップにしたネックレスなどしていた。私はそんなにブランドに詳しくないが、後発の金持ちの持っている品でなく、代々継承している由緒ある品のようだつた。

私たちは速水の入学に際しての簡単な挨拶と打ち合せをするのだけつた。

もつとも速水は自分でカリキュラムなど把握していたし、逆に速水ママは挨拶に来たいだけで何も分かっていないようだつた。

「あの、浅倉先生のコースつてキャンセル待ちも出るんでしょう。入  
れて下さつとうれしいわ」

「秀助くんに簡単な成績の資料を見せてもらいましたので、ついで  
来られると判断いたしました」

秀助くんか・・・変な感じ・・・

「あの、先生は勉強が苦手な子にも非常に熱心にめんどうを見てく  
れます。が、遅刻や無断欠席には厳しいので、マナー、エチケットは  
気をつけて」

速水ママは神妙にうなずいて、速水は笑いをこらえるのこ骨が折れ  
るよひだつた。

「浅倉先生の講座が軌道にのつたら、英語・数学・理科なんかもお  
すすめします」

速水ママは喜んで、うなずいていた。グレた息子が勉強すると言い  
出しお、喜んでいるのだろう。

須賀さんは「入学キャンペーン品です」と速水に小さい包みを渡し  
た。一万円の図書カードだ。

速水はママに連れられて帰つていった。

私は須賀さんと事務所に寄つた。受付の女の子がコーヒーを出して  
くれる。給湯室でインスタントコーヒーと、クリーミーパウダーと砂  
糖をまぜて作るコーヒー。それはそれで、また一興。

「かわいいお母さんでしたねー。若いし、キレイだし」

私は笑顔だけ返した。医療法人アクアの次期理事長夫人。病院や老人保健施設をいくつも仕切っている。そういう貴禄があった。ゴッドマザーだ。

と、須賀さんが私に一万円の図書カードをつきつけてきた。私はもちろん、おしかえした。

「今回、先生のスカウトですから営業奨励金」

「そんなのいいですよ！私たちの間で水くさい。それに今後、こういうこともないと思うので、かえって負担になるし」

「いやいや、先生、よく働いて下さるから」

結局、私はカードを受けとった。本 자체はよく買いつ。しかし、最近はインターネットでの注文が多い。でも急に書店で買う時もあるし。それより、一万円分で私はささやかな宴をすることにした。

## 夜のストレンジャーズ

何人かの先生にメールをしておいてから、古文と漢文を講義した。古文は「長谷雄草子」「松陰日記」。漢文は韓退之の漢詩。「白氏新樂府」。「唐宋八大家読本」など。

もともと私の講義は脱線や小話が味とされている。

生徒たちを帰らせてから、ケータイの電源を入れる。

教務主任の松浦先生。出席。

堀江教授。出席。

英語の小山田先生。出席。

化学の近藤先生。出席。（この子はまだ大学生で、生徒のいない舞台裏ではヒロ君と言っているけど）

私が一万円分出すので、喜んで出席してくれる。

私が控え室を片付けると四人の先生はロビーで会話をしていた。  
その口は金曜日だった。

「あの金髪の子、浅倉くんが受け持つの？」  
「そうなんちゅうやつたんですよ」

「聖イグナチウスの有名人らしいっすね」

私たちはちょっと歩いて、近くの居酒屋に入った。私が予約していた。海鮮のお鍋。焼き鳥。和風のサラダ。料理はとりあえず、そろそろ頼んでおいた。

私とヒロ君は年長の先生のグラスや杯にビールや日本酒をついだ。そして、私がヒロ君のグラスにビールをついで、最後にヒロ君が私のグラスにビールを注いでくれる。

「速水に乾杯！」

いい加減な音頭で飲み会を始めた。

私はお酒はあんまりいけない方で、ビールを一杯飲むと、つくねやネギマを食べ出した。ヒロ君は手酌で飲み出した。

「ヒロ君、ピッチ早いね。明日、部活ないの？」  
「ないから飲むんすよ」

ヒロ君はしがさく、近江商人と小山田先生に言っていた。滋賀県から名古屋工業大学に来ていた。専攻は化学。アメフトをやっている。（もつとも私はアメフトとラグビーの違いも分からぬ。）背はそんなに高くないが、筋肉質で、お洒落。赤いメッシュを入れていた。ちょっとケチなところが欠点。今日も私に「ゴロニャーン」として、一銭も払わないつもりだろう。

小山田先生はたいへんな毒舌家で、知的なペシミストだった。日本嫌い、人間嫌いだった。

「今時、あんな髪染めたり、バイク乗つたり、浅倉くんと双璧の絶滅危惧種ですよ。はんかくさい。昭和で顔も頭の中も止まっているんですよ」

松浦先生とヒロくんが笑い転げる。ぶははつ。私は鶏肉を串からかみちぎった。

「特攻服の写真、見せてもらいました」  
全員が大爆笑する。松浦先生が言つ。

「浅倉くんや速水くんのような人はどんな時代にも、どんな所にも一定程度います」

私は口をどがらせた。

「でも、そういう人間が『オデュッセイア』とか、『神曲』とか、『コリ・シーズ』とかを生み出してきたのかも知れないですよ  
「まあ、そうかもしません」

松浦先生が海鮮鍋にはしをのばしたので、私も取り皿とはしを手にとる。堀江教授も。

白身魚と海老とホタテと野菜とマロニーちゃんをとつた。話が段々、仕事と離れていく。

小山田先生。

「先日、持病の薬をもらいに病院に行つたら、自称立教出身というジジイが、肋間神経痛のことを六感だと思っているんですよ。私はこういう馬鹿な人間が大嫌いです。こういう人間は自分が社会の歯車の一つであることにも気づかず、自分を世の中の中心と思っている廢人に等しいおめでたい奴です」

少し酔つてきたのか、私は大声で笑つた。ヒロくんと堀江教授はプロ野球の話をしていた。松浦先生は私小説を最近書いているとおっしゃつた。

その始まりを少しうかがつたが、私が書き散らしている売文と違つて、オールドマスター<sup>ズ</sup>のように重厚で、知的かつ詩的だつた。私はきまり悪くて、「お鍋にうどんかご飯入れます?」と尋ねた。

多數決でご飯をお鍋に入れることになり、（私とヒロくんが負けた。）食事を締めた。

とりあえず、私が払つて領収書をもらつておいた。

「帰れます?」ヒロ君が私のコートの裾をつかんで、訊いてきた。

「終電が近くなると、指定席の特急があるから大丈夫」

私は千種から金山まで中央線に乗り、金山で特急に乗つて、大垣まで帰つた。

大垣駅の南口から、大垣共立銀行の本社ビルの辺りまで、大垣の商店街がある。駅に近く近く、商店街の裏通りのはじまりの辺りに祖父母が建てた古びたマンショングルームがある。他人様にかして、金もうけ出来るほどじゃない小ぢんまりとしたマンション。そこに私は住んでいた。郵便受けの郵便物を持って自分のフロアまで階段を昇る。

私はテレビを見ないので、和風の寝間にに入る。NHKのラジオをかける。フランク・シナトラの「夜のストレンジャーズ」が流れる。

少し酔っているので布団に寝転ぶ。オイルヒーターのスイッチを入れて。

郵便物を見る。家電量販店のダイレクトメール。不要。車のディーラーのダイレクトメール。不要。日本国文学会会長（大学時代の指導教官）の手紙。目を通す。「季刊『中世日本文学研究会会報』『大正文学勉強会レポート』が休刊となりました。厳しい状況です。学会の機関誌『日本文学と研究』をお勧めの教育機関などで定期購読して下さい」印刷された手紙。と、一枚のホテルの便せんが同封されていた。手書き。殴り書き。

「この前、観世能楽堂で早稲田の能楽研究の教授と大喧嘩した。早稲田の教授が会長選挙に出るかも知れない。順逆をあやまらぬようにな」

順逆をあやまる。天皇や将軍に謀反すること。会長は自己を天皇や將軍と同列に匹敵させているらしい。この手紙も不要。

栄の和菓子さら屋さんのダイレクトメール。必要。お歳暮を注文するかも知れない。あら、エアメール。開封して、私は真剣になった。大学一・二年の同級生。四富くんの手紙。

「浅倉悠哉先生御机下。文部省からイギリスに派遣されて、学習障害児教育の研究をしてあります。来年、帰国して愛知教育大学の助教授として赴任します。一度、名古屋にうかがい、下宿などを探したいです。（恥ずかしながら、周りに安い店の多い学生街のようなところがないでしょうか？）・・・」

この手紙には返事をしつかり書かなきや。私はエアメールを仕事のカバンに入れた。そして、眠気が強くなり、寝てしまつたようだ。6時か7時ごろ「コースの声で一度目覚めたが、お手洗いに立つて、少し寝直した。

ケータイの目覚まし機能で改めて起きると、入浴して出かけた。

## イケズに負けず

土曜日、大垣から名古屋行きの電車に乗る。部活の大会に行く中高生や、結婚式に行く着飾った人が多い。私は立つたまま、塚本邦雄の文庫本「定家百首・雪月花」を読んでいた。

名古屋で中央線に乗り換え、千種まで行く。

土曜日と日曜日は高1と高2の子のめんどうを見る。速水とは初顔合わせだが、淡々とやるだけ。

私は「漢文基礎」の教室に入った。

「ここにちは。今日から聖イグナチウスの速水秀助くんがクラスに入ります。速水くん、このクラスでは田中雄一の「漢文早覚え速答法」をテキストに文法を十回ぐらいでマスターします。だいたい講義の前半で文法を説明し、後半はプリントをやりながら、漢文の知識を学びます。今日は比較です」

私はけつこう唯我独尊的なところがあり、サッサッと講義を始めた。速水は意外と集中して、真剣に勉強していた。もっとも、それは想定していた。本当に勉強が苦手だったら、聖イグナチウスに入れなかつただろう。

もつともプリントをやつしていると、速水はけつこう「ひじき」を出してきた。

「ねえ、『三國志』や『西遊記』は、やんないの？」

「四大小説は高校まではあんまりやらなーの」

「四大小説？あと一つは何なの？」

「『水滸伝』と『金瓶梅』。『金瓶梅』は工口なの」

私は生徒に工口倉とあだ名をされていた。

速水は耳まで真っ赤にして「中国人は心が汚いっすね。毎ドラマか韓流ドラマみたいっすよ」と抗議の声を上げた。「工口倉の古文、もつとすごいよ！」と野次がどぶ。女の子だった。速水はテキストで赤い顔を隠した。

漢文の後、ボワドヴァンサンヌにいると、速水が入ってきた。

「どうだった？」

「学校よつずつといいけど、先生、マズイよ。一応、聖職者でしょ」

「聖職者あ？そんな言葉、十年ぶりぐらいに聞いた」

速水はプリプリしながら、ケーキを口に運んだ。

古文も一、二年生は文法とプリント。古文の方が学ぶべきことが多いので、上手く時間割を組んで休講にならないようにする。

その日は係り結びの発展用法を教え、和歌を講義した。

控え室で片付けていると、速水が来た。

「ねえ、さつきの女の子って遠山食品産業の令嬢じゃない？」

「知り合って？」

「ミラジランドスクウェアのパーティーで会ったような気がする」

意外と狭い世界の中に私の生徒たちはいる。

「口説かないでよ」

「俺は口口じやねえよ。硬派だもん」

私は控え室の窓から速水がバイクで帰つていいくのを見送っていた。

翌日、日曜日は現代文の評論の講座。小説の講座。前者では清岡卓行と高浜虚子をやった。後者は太宰治の「斜陽」

その日の速水はどこかのサッカーのチームのユニフォーム（多分、ヨーロッパのチーム）を着ていた。

「サッカーしてきたの？」

「いや、この服はミーハーだけど、俺は武術やつているから。キックボクシング。練習して、二三二クラーメン食べて、ここ来た」

私は微笑した。

速水は学力的にはついて来られる。あとは速水が周りに溶け込んで、受け入れられて、楽しく過ごせることを思つた。

その日は控え室で遠山ゆかりに話しかけられた。

「速水くんってチャラ男かと思つたけど、意外と真面目だね」

「意外じゃないですよ」

「今度、とびきりH口で話して挑発してよ」

「あなたがやればいいじゃないですか」

「やだー、人格疑われちゃう」

そこには速水がやつてきた。

「あー、遠山さん。あの・・・母が遠山さんの母様によろしくお伝え下さること申しておりました」

「速水くんつて、小さい時、うちに来なかつた?」

「そうかも知れない」

「何かすごいバクバクとケーキ食べてた」

「じゃあ、そうでしょう」私が言つた。

「・・・送つてあげよっか」

ゆかりの顔が喜びに輝くが、私は言った。

「ゆかりは彼氏の智樹と帰るでしょう」

速水とゆかりはまざまちなく部屋を出ていった。

「イケズやなあ・・・」

白衣のヒロくんが部屋に入ってきて、窓の外を眺めた。

「おっ！イケズに負けずや！」

私も外を見る。

オードリー・ヘップバーンのようにゆかりは速水のバイクの後ろに乗っていた。私は言い様のない気持ちにかられていた。胸がザワザワする。

## わみじい休日

私はヒロくんに軽く誘われたが、断つて帰ることとした。うかうかと誘いにのると、金山で降りてテニーズかどこかで電車がなくなるまで食事かお茶をして、タクシーでヒロくんの部屋に行くことになるだろ？。（しかも食事代やタクシー代は私が出すことになるのだ。）

年度の後半は忙しくて、とても外泊など出来ない。

金山までの電車は夜はすいている。一応、田舎から都市に向かうことになるからだ。鶴舞公園の辺り、ボウツとしていた。ネオンが多い都会になってきて、私はハツとして電車を降りた。金山だ。

東海道線に乗りかえる。大きい駅の周辺以外はけつこう田舎である。土、日の夜はそんなに混んでいない。だいたい座れる。私は闇を眺めていた。何という不満も問題もないが、何か中途半端な感じだ。

私は古ぼけたマンションの階段を静かに上がった。音をあまり立てないように鉄のドアを開ける。私は寝間以外はほとんど使っていない。うがい、手洗い、洗顔をしてから、NHKラジオをつける。今月のおすすめ映画を紹介する番組をやっていて、私は日記に紹介された作品をメモした。紅茶をストレートでいれて、クッキーを少し食べた。

眠気がやってきたので、歯を磨き、灯りを消した。本当に眠気がやつて来て、私はラジオを消した。

翌日は正直なところ、昼ぐらいで寝ていた。寝だめ食べだめは出来ないと一般に言つるのは嘘じやないかと思つてゐる。私は血圧も低く、起きると不機嫌になつてゐる。

ムスッとしながら、私は一つ下のフロアに降りた。ドアは開いていた。母が食事の支度をしてゐる。私は黙つて食卓についた。

出前のお寿司があり、牛肉と野菜がある。

「悠哉、すき焼きとしゃぶしゃぶ、どっちがいい？」

「すき焼き。玉子あるの？」

「あるわよ」

母はわりしたを作り始めた。私はお寿司にはしをのばした。一応「いただきます」と言つて。お寿司を食べ、玉子をからめて牛肉を食べ、私も陽気になってきて、速水というハンサムな不良のこと、学会の手紙のこと、四富くんのことなどを話した。母もすき焼きを食べ、「ビール飲んでいい?」と言ひ出した。私は母が食事の時、アルコールを飲むのは好きじゃなかつたが、うなずいた。

私と母。氣難しい二人が生き残つて、奇妙に共生してゐる。政治家をやつっていた祖父。祖母。入り婿だつた父が亡くなり、妹は嫁ぎ、浅倉家はさびしいものだ。

「来週、藤山直美のお芝居観に行くから、ついてきて、水曜日」

私は頭の中で計算した。御園座のお芝居は15時か16時くらいに終わる。それから夕方のクラスに間に合つからいいか。藤山直美は私も観たいし。

母は握り寿司を私にくれた。少食である。私はすき焼きもたくさん食べた。

私もマザコン。速水もマザコン。

私は自分のフロアに戻った。アルコールなしでも、ちょっと寝出  
来る。

夕方、起きて、映画を観に行こうかと思ったが、少し疲れがあり、  
部屋にいた。ラジオドラマで藤沢周平の作品をやっている。私はこ  
ういう国民的作家は好きじゃない。私が好きなのはどこかアウトロー  
ー的な人間か、現代のことを忘れさせてくれる古典だった。私はラ  
ジオドラマは聞かず、CDでドビュッシーやラヴェルの曲を聴き、  
本を濫読した。一冊を集中して読むのではなく、いろいろな本をつ  
まみ食いするのだ。そういう時に野放図にいろんなアイデアが浮か  
ぶ。そうすると気分がよくなり、私は珍しくカクテルを飲んだ。少  
し浮かれて、私は寝た。

火曜日はだいぶ疲れもとれた。

母と共に用しているヴィッツで郊外のショッピングモールの中のシネ  
コンや温泉に行く。映画を観て、合間にちょっと買い食いをする。  
クレープと珈琲を買って、ファードコートで食べる。それから温泉に

入る。薬湯に20分ぐらい半身浴する。私はサウナはダメなのである。お風呂を上がってハチミツソフトクリームを食べる。

休みの日は過<sup>か</sup>ごしにくいなあ。私は何か世の中に居心地の悪さを感じる。ベビー・カーを押す若い夫婦。周りの結婚ブームも過ぎ去った。同級生が結婚したり、子供が出来たりするとお祝いを贈つたりするが、自分自身は何か取り残されている感じがする。いや、それ以前にサラリーマンの子とはなかなか話が合わない。私の周りにいるのは、子供どじつちゃんばっかりだ。

ふつと思つ。

速水は本能的に私の気持ちを分かつてくれるかも知れない。周りからは、恵まれている、不満はないはず、と言われるが、何処かasmine。速水もそんなせみしさを抱えて試行錯誤しているのかも知れない。

とりあえず、もう一本、映画を観た。明日は職場に行く。  
その方が気が紛れる。

## 意地悪コーヤ

水曜日、私が控室に入るやいなや、世界史の牛島先生がやつて來た。その日の夜の推薦入試の面接の説明会についての話かと思つたら速水のことだった。

「浅倉先生、あの金髪の子、連れてきたの？」

牛島先生は四十前後で、どこかの私大の先生で、バイトで予備校の仕事をしている。

細身で、長身で、神経質な人である。

私が牛の性格をワル系、グズ系、ヨタロー系の三つに分けられると発言したことを誤解して、根に持つていた。（牛の性格については山藤章一氏の本に書いてあつた。）

「今のところ、自習室で大人しくしてゐるけど、けつこう話題になつてるよ」

私は苦笑した。

「悪い噂になつてます？」

「いや、そうじやないけど。痛々しい子だね。がり勉のボンボンのくせに、あんな風にあがいたりして」  
私の心にさざ波が立つた。

牛島先生は私の部屋の珈琲を勝手に来客用のカップに注ぎ、クッキーの缶も勝手に開けた。牛島先生は私にワル系と言われたと思って

いるようだが、実際はヨタロー系である。

むつとも、その日は牛島先生は私と戦争をするつもりではなく、仕事を打ち合わせをして帰つていった。

その夜、私は特進クラスじゃないクラスの英語を教えてから、推薦の子たちを集め、面接の説明をした。生徒たちは真剣に耳を傾けたり、メモをとつたりしている。よくある質問、注意すべき質問などを説明する。

終わりがけ、大人の知恵を少し話した。

「就職活動なんかだと、待合室にスパイがいるって言うでしょ。それは極端としても、面接が終わってすぐ感想を口走つたりしない方がいいですよ。せめて大学の最寄り駅から大きいターミナル駅に戻るぐらいまでは出来不出来を話さない方がいい。大学の関係者が何聞いてるか分からないうから」

それを言つて私は席を立つと、一礼した。生徒たちはワッとなる。「美佐ちゃん、すぐ感想言いつつ」「勘太、口にチャックしろよ！」

私は牛島先生とテーブルの上を片付けた。幸い私たち二人とも「頑張るぞ！オーオー！」などと叫ぶのは大嫌いなので、アッサリしたもの。（そういう意味では私たちは似た者同士。）

控室に帰る時、自習室をのぞいた。速水が勉強している。

木曜日と金曜日は受験生に大学の過去問を講義する日で、田が回る  
よつだつた。

土曜日。古文基礎で「大和物語」を講義する。仁明帝が崩御した後、五条皇太后に暗殺されることを恐れた僧正遍昭は失踪する。しかし、小野小町は清水寺で偶然、遍昭に再会する。そして、昔の人の工チケットとして歌を詠む。

「若の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我に貸さなむ。若の上に旅寝をするととても寒い。お坊様の苔の衣を・・・最後の一節、ゆかり、訳して。我に貸さなむ」

「私にかして欲しい」

「はい、よく出来ました。速水、返歌を訳して」

「世を背く苔の衣はただひとへかさねばつらしげに一人寝む。世を背く僧の苔の衣は一枚きりだ。かさないとつらじ・・・」  
速水はそこで言い淀んだ。

「一緒に一人で寝よう・・・」

「一緒に一人で寝るって、何するの? わかんない!」

クラス中が大爆笑した。速水は耳まで真っ赤にしている。

「SEXしよう」とでしょう。」

ゆかりが言つて、速水は教科書で顔を隠した。

「H口倉のアホ！だいたい僧正って坊主だろー心が濁ってるぜー！」  
私はプリントを配った。

「でも、本居宣長はこの辺りを論評しながら、僧でも志やSEXをしてもかまわない。それが日本の心だって説いたんですね。来週までに読んできて」

「H口倉の師匠だぜ！」

速水のおかげでクラスが活性化されている。

その日も速水とゆかりはバイクで帰つていった。智樹のことはちょっと心配だったが、私は比較的満たされた気持ちで帰途についた。

翌日、速水にカウンターをくらつた。速水は私を含めた教室のメンバーにプリントを配つた。「意地悪コーヤの真つ赤な真実」というタイトルで、私のくせがまとめてあつた。速水はプリントに沿つて私の真似を始めた。

「ボワードヴァンサンヌか控室にいる時、苛立つている時」

速水は珈琲を飲む仕草をしながら、ボールペンで机を一定のリズムで叩いた。私は苦笑した。よく観察している。出来の悪い論文や、生徒の成績が下がつた資料を見ている時の苛々している私を表している。

「いやっ！」プリントを見てる

速水はメガネを外す仕草をして、プリントを顔に近づけた。私は真

つ赤になつて抗議した。

「それは印刷の質が悪いし、誤字・脱字が多いからですよー。」

「しゃべり方が丁寧だから目眩ましされているけど、けつこいつ書つ  
ことがキツい」

皆が手を打つて大爆笑する。速水はピースをして、「近々、第一弾  
を出しますー！」と言つた。

腹立たしいと言えば、腹立たしいが、面白かった。

その日は鷺田清一と内田樹の評論、川端康成の「掌の小説」を講義  
した。

クラスに反逆ムードが広がり、ゆかりが「エロ倉つて朗読が好きな  
のよ。大学時代、演劇のサークルをやれなかつたルサンチマンを原  
動力にしてるの」と言つた。

私の時間の後に、速水とゆかりたちは休憩室でお弁当を食べていた。

「近藤先生つてさ、小栗旬に似てるよね」

「はあ？ 若槻千夏か、チュー・トリアルの徳井じゃない方に似てるよ  
たまたま通りすがつたヒロくんが「こらこら、てんご（悪ふざけ）  
言つたら、あかんで」と、速水に抗議していた。

## 夢だもの

その日の私は大垣に帰らなかつた。翌日に用事があつたので、サー ウインストンホテルに泊まつた。ビジネスホテルぐらいの料金で泊 まれる部屋がある。ビジネスホテルよりは広くて、きれいな部屋だ。 私は部屋に入ると必ず、洗顔、手洗い、うがいをする。疲れている ので、スポーツドリンクを飲み、ベッドに横になる。自宅では見な いTVを少し見る。少し疲れがとれて、ショーキーラムやエクレア を食べて牛乳を飲む。入浴して寝た。

翌朝はちょっとだけぜいたくして、ホテルで朝食をとる。アンティ ーク家具や陶磁器、ガラス細工で飾られた食堂に行く。 まず、珈琲を頼み、パンを幾つかオーダーする。

パン、バター、ジャム。ハムやベーコン、ウインナー、スクランブルエッグ、サラダ、焼き野菜などが運ばれてくる。最後、果物と珈琲で食事を締める。

チェックアウトは1~2時なので、部屋でゆっくりする。そして、昼 近くチェックアウトすると、近くのビルの展望カフェに入った。

松浦先生、小山田先生、牛島先生がすでにいる。  
今日は歌の会。

「何か食べます?」  
「いいえ、いいです」

私たち四人は時々、自作の和歌や俳句を発表しあっていた。

「裏通りノスタルジック秋句ふ」

小山田先生の発句に私が下の句をつける。

「天国の雲の上のKさん」

「ああ加藤和彦のことですね」

私たちはひとしきり、あんな大スターが自殺するなんて信じられない、とか、今年は井上ひさし、三浦哲郎、河野裕子、森澄雄、つかこうへいとか大物の物故が多い、とか話した。句のよしあしと言つより、句を手がかりにいろいろ話すことが会の目的だつた。

私

「銀杏にも男と女があるんだよ、そんな言葉を思い出す秋」

「ユーヤの作品はライトヴァースですね」

小山田先生の言葉に一瞬、ヒヤッとする。牛島先生は何事かを松浦先生にムキになつて話していく気づかないようだつた。

私もすぐ、「アララギ」をどう思うかといった文学談義の方に夢中になつてしまつた。

夕方近く、松浦先生は牛島先生に「車で送つて下さいよ」と言つて、二人は帰つていつた。

私はボールペンで静かに二回、机を叩いた。

「人の前でユーヤなんて呼ばないで下さいよ」

小山田先生は古歌で答えた。

「いくそたび君がじじまに負けつらむものな言ひそと言はぬ頼みに（何回あなたの沈黙に負けてしまつただろうか。何も言わないでと言わないことだけをあてにして、つい、また話しかけてしまった。）

」

「その歌つて源氏の中で一番ブスなヒロイン、常陸の女王（末摘花のこと）に贈られた歌つてご存知ですよね？」

小山田先生は首をかしげた。

「夜は何を食べましょうか？」

「和食がいいです」

このオヤジイ、絶対、確信犯。そう思いつつ、私は小山田先生について行つた。一緒にカニ料理のお店に行つた。

その日は夜遅く、大垣に帰つた。帰りの指定席の特急の中でウトウトしながら、小山田先生が奥さん、子供にお寿司をお土産に買っていたことを思い起こしていた。

疲れていて、眠りが深かつたのか、その翌朝は比較的早く起きた。  
珈琲を飲む。

卵を一つ使い、オムレツを作り、駅ビルのパン屋さんで買ったピザをレンジであたためる。親戚にもらった柿をカットする。

その日は本を読んだり、手紙に手を通したりして、過ごした。四宮くんにも手紙を書く。

「四宮徹先生御机下。お手紙ありがとうございました。御高著『イギリスの障害児教育』も拝読いたしました。名古屋にはもちろん、学生街が「ござ」います。一緒に探しに参りましょう。ところで、もしよかつたら、私の勤め先でお仕事なさいませんか。イギリスに滞在されていたのなら、英語は問題ないでしょう。国語、数学、社会なんかもお得意ではありますか。よろしかつたら、教えて下さい」

私は悩み相談というのは昔からあまり好きでなく、ラジオで悩み相談が始まったので、ラジオを消した。中島みゆきの新しいCDを聞く。「夢だもの」という曲があった。私の人生も夢だもの。

翌日は母と午前中に出かけ、御園座でお芝居を観賞。幕間に食事をする。

夕方には地下鉄で千種・今池方面に向かう。私立高のおとなしい子たちに英語と古典を講義する。ほとんどは教科書の解説である。もつとも彼らは学校でいい成績をつけてもらつて、推薦で進学することが多い。だから、彼らなりに真剣である。

講義の後、速水が控え室に来た。

「あれつ、今日も来てたの？」

「うん、自習室に。といひでさ、今のクラスに前園慎一郎くんつて来てるでしょ」

「知り合つて？」

「いや、何か気になつて」

「B」つてやつ？」

「発言に責任持てよ！オッサン！あの子つて美大行こうとしてるの？」

「そうだよ」

「美大つて難しいの？」

「ペーパーテストは難しくない。実技が一番たいへん。あと、小論文があるけど、医学部と違つて独創性やアイデアが大事なの」

「前園くんは合格判定は？」

「Aかな？」

「ちょっと見てみたいな前園くんの絵」

「いいよ、頼んであげる。木、金はたてこんでいるから、土曜日こね

「頼むね」

速水は帰つていった。

木、金と仮想生相手の仕事をする。

私は教卓に寄りかかって、話をした。

「大鏡は道長以外の藤原一族は批判しているって教科書に書いてあるでしょ。道長は礼賛しているって。でも、実際、通して読んでみると道長のことも批判しているんですよ。けつこう」

生徒たちがドッとして笑う。

「例えば道長は紀貫之や白楽天より詩歌が上手いとか・・・ほめ殺しなんですよ」

文系で一番優秀な小島がふざけて言った。  
「速水くんも浅倉先生にほめ殺されちゃいますね」

「あんなもん、道長と比べたら大物じゃないから黙れです」  
皆がドワッと笑う。

木、金は控え室でコンビニのパンなどを慌ただしく食べる」ともある。もつとひどいと、珈琲と菓子など。非人間的生活だが、仕事はお声がかかるうちが華らしい。

土曜日、前園慎一郎に声をかけた。

「前園、速水って知ってる?」

「知っています。今、人気の子ですよね」「あいつ、前園の絵、見たいんだって。見せてやつてよ」「えー、僕の絵なんかたいしたことないんですけど」

「漢文基礎の後、ちょっと控え室に来て」

漢文基礎で「反語」をやる。問題文は「十八史略」

「あつ、これ『三國志』の話じゃん」

「『十八史略』ついでに載ってるバージョンのね」

「でも、だいたい分かるよ。呂布の死のところだね」

「名作を読んでもくと、つぶしがきくのです」

その講義の後、控え室で速水と前園を対面させた。

「聖イグナチウスの速水です」

「光が丘学院の前園です」

「スケッチブックの中身、見たいんだって」

前園ははにかみながら、中身を見せてくれた。

「すげえっ！これ前園くんが描いたの？」

「そうだけど、全然すじへないです・・・浅倉先生にいろいろ教えてもらつて・・・」

「えっ！H口倉って絵も描けるの？」

「いや、実技はダメだけど、美術史の勉強したから」

「けつこう操られています。お正月に細見美術館のコレクション、観に行かされたり、トリエンナーレ行ったり」

「美大合格したら、来年のゴッホ展、行く約束してるんだよね」

「俺、マンガは描けるけど、けつこう芸術的な絵は」

和氣あいあいとしていた。  
といひが。

「先生」

須賀さんが困った顔で入ってきた。速水と前園にチラと目をやつたが、重大な要件だったので、ためらわずに告げてきた。

「野村くんが家出したらしくて」

私は片手で顔を覆った。

野村英治は一浪している子だった。岐阜市に住んでいて、中堅の公立高校に通っていた。家が歯科医で、歯学部を受験したのだが、少し体の弱いところがあり、受験に失敗してしまった。

氣も弱いところがあり、一浪目はショックを引きずつて、よく家出をして、また駄目だった。

私はカウンセリングの勉強もしていたので、小論文指導といつ名田で月一回ぐらい面談していた。

頭の中で一瞬のうちにいくつかの可能性を考える。多分、先週の全国テストが失敗したんだ。推薦入試に気をとられて、気配りが足りなかつた。それに年末年始の雰囲気になつてきたのも、よくなかつたのかも。精神的に悩みのある子にとって夏休みや年末年始の楽しい雰囲気も、心の重荷になることがある。

私は意外と果斷なところがあり、英治に電話した。出ない。留守電を入れる。

「英治、どこにいるの？みんな、心配してるから、連絡して。講義始まるから、留守電がメール入れといて」

同じような内容をメールでも伝える。

あー、ちくしょう。次の講義が終わるまでに連絡して来なかつたら、どうしよう？

「大丈夫？」

速水が心配して尋ねてくる。前園は意外と悠々としていた。

「大丈夫だよ。先生が迎えに行くとたいてい素直に従うから」

私は笑えなかつた。しかし、虚勢を張つて、「や、古文やろ」と言った。

「野村、また家出したんだつて」と生徒たちが話していた。私は動搖を隠して講義をやる。賢い子が多いので、みんな、協力的にしてくれる。

「井原西鶴は人間の欲望や愚かさ、醜さを徹底的に見つめました。  
『人ほど賢く、まだましやすきものは御座なく候』『人は欲に手足のつきたるものぞかし』西鶴はそう豪語して、伝統的文学の美を否定し、金や性欲を追い求める人間の悪の姿を描いたのです。ピカレスクです」

速水の怒りが爆発する。

「心の汚いジジイですねえ。俺はこういう奴、大嫌いです  
『そりかなあ。こういうのこそ、眞実の文学だと思うけど』  
優等生の村上潤が言つた。

「『家にありたきは桜梅松楓、それより金銀錢米ぞかし』『洛中洛

外岡屏風は銀山を掘り出す絵に描きかえせる』『はかない朝顔は豆に植えかえさせる』そんな挑発的な表現がたくさん出でます。しかし、西鶴は鬪つべき伝統文学を十分理解していたことも見逃してはいけません』

「俺はこいついう奴は大嫌いだぜ！－！」

私は苦笑した。速水の一本気な性格は西鶴に力チンときたのだろう。

その日は少し早めに講義を切り上げる。控え室に戻り、ケータイの電源を入れた。

ホツとした。

野村からのメールがあつた。

「アスナル金山にいます」とのことだった。

私はコートを羽織ると予備校を飛び出した。

中央線で金山駅まで行く。どちらが表か裏か分からぬが、グランコートホテルやスターバックスのある方の反対側に、アスナル金山というスペースがある。中央にステージがあり、日中はいろんな行事をやつている。それを囲むように飲食店やショッピングがある。野村は野外ステージの席に座つていた。

「英治、何やつてるの！？ずっと外にいたの？」

野村はうなずいた。

「どうかに入らうよ。寒いよ」

野村はまたうなずいた。

私はデニーズが好きで、入った。

「私、急いできたから、何か食べていいい？英治も食べたら？」

「俺は珈琲でいい」

私は和風ビーフシチューのセットを頼んだ。

「何で家出したの？模試のこと？」

野村は涙ぐんでうなずいた。

「何か上手く行かなくて・・・」

「そんな一喜一憂してたら・・・最近、成績も安定してるし・・・」

野村が何か言い淀んだ。

私は黙つていた。料理が運ばれてくる。温泉玉子をご飯にかけて食べ、カキフライを食べた。シチューのお野菜にはしをのばすと、野村が涙声で言った。

「成人式の・・・案内が来て・・・それがイヤだった・・・」

野村がすすり泣いた。落ちつくのを待つて、私は言った。

「何か食べたら？」

「・・・鍋焼うどんのセット食べる・・・」

私は和風ビーフシチューを食べていた。

成人式の案内がイヤだつたと言つ英治を私も笑えない。私も時々、世の中に上手く溶け込めない自分に苛立つ。

ガツガツと食事する英治から、ちょっと視線を外すと、若者のグループが食事したり、酒を飲んだりしている。

前に英治が家出したのも名古屋港大花火大会の夜だった。

英治のさみしい背中を忘れられない。

今はそのさみしさに寄り添つてあげるしか出来ない。

新しいチーズケーキを二人とも頼む。

英治は落ち着いたようだつた。

「先生、ごめんなさい」

「いいよ、今日は新しいチーズケーキが食べられた風流な日」

二人で指定席の特急に乗り、帰ることにした。

岐阜に近づいた時、私は尋ねた。

「大丈夫？ 家まで送るうか？」

「いいよ。そしたら先生、終電なくなるでしょ。ちゃんと帰れます」

野村は岐阜に最近建てられた43階のタワーの中のマンションに住んでいる。

野村を見送つてから、私は座席にもたれた。

野村は最後に私を気づかってくれた。

持ち直すかも知れない。

持ち直して欲しい。

帰宅するとラジオを聴き、若冲の画集を眺めた。

牛乳を飲む。

やがてリラックスするヒーッと疲れが出て、眠った。

翌日、私は速水やゆかりたちに現代文を講義した。速水が話しかけてくる。

「icusの前、『大和物語』やつたじゅん。六歌仙でバンド作ろうって話していたの。在原業平と小野小町がヴォーカル、僧正遍昭がギター。喜撰は・・・キー・ボードでいいか。大友黒主がドラム。ベースは文屋康秀」

「それで皆がそれぞれの役やるの？」

「速水くんは業平」

「やだね、チャラ男は」

「僕、ギター やるから速水くんは業平」  
村上潤が言った。

「僕、ピアノやつてるから、キー・ボードやる」

野上佳彦が言った。

「智樹、ドラムやつてよ」

「いいよ」

ゆかりが彼氏の智樹に言った。

「じゃあ、僕、ベースやります」

前園慎一郎が言った。

「ふうん、じゃあ、ゆかりが小町か」

私が言うと

「いいえ、小町って百田間、男をパシリにしてた悪女でしょ。ゆか

りは役者不足だから、H口倉先生にお譲りします

皆がドワッと笑う。私も苦笑した。

田崎徳衛の「百人一首の作者たち」と司馬遼太郎の「項羽と劉邦」を講義する。

月曜日、私は母と名古屋に出かけた。松坂屋美術館でアール・ヌーヴォーの美術展を観賞する。

それから歩いて東急ホテルに行つた。ボジョレ・ヌーヴォを飲む会に参加するのだ。場所は一階のラウンジ、グリンデルワルド。

喫煙席の方にグランドピアノが置いてあり、生演奏が行われている。私と母は禁煙席に座つた。ボジョレ・ヌーヴォやいろいろなワインとチーズはウェイター、ウェイトレスにオーダーする。会場の中央にある軽食は自分でとる仕組みになっている。母はチーズが好きなので、席に座つてオーダーしている。私はサンドイッチと果物をとりに行つた。おつきあいでボジョレ・ヌーヴォを一杯飲んでから、私はシャンパンを飲むのに切り替えた。

「あの・・・浅倉先生じゃないですか？」

「あ・・・えつと」

「和泉です。北区の。娘がお世話になりました」

酔いだしていたこともあり、とっさに思い出せなかつたが、一年ぐらい前にめんどうをみた子の母親だと気づいた。

私はシャンパンのグラスを持ったまま、少し立ち話をした。私の母

は何も気にせず、ワインやチーズをオーダーしており、私はお嬢様育ちの母に苛立つた。

和泉さんが席を去つていいく。

「ママ、挨拶ぐらいしてよ！」

「でも全然知らない人だもん」

私は腹を立てて、マスカットを口にした。甘い果汁があふれる。

母親をタクシーに乗せ、指定席特急のチケットを渡すと私はプリシードホテルに宿泊した。翌日が祝日（勤労感謝の日）で、特別講義があつたからだ。

私は翌朝、繁華街を歩いた。東京もそつだつたが、繁華街は朝がわびしい。道も汚れている。いろんな店が開く十時になるまでがわびしいのだ。

地下鉄で千種の予備校まで行き、私は十時から医学部や難関大学の受験のための小論文の教室をスタートさせた。朱を入れて添削した原稿を生徒に返却する。ゆかりと速水は受験生ではないが、参加していた。私は一つ一つの論文を論評し、医学部受験でよく出るテーマの解説をした。ちなみにだが、今は医学部でも医療に関する」とではなく、感性を問うものが多い。

「次の俳句を読んで答えなさい。『その方がいいと思うと蝸牛』その方とは何でしょつか？色々、考えられますね。私はこう思いました

た。蝸牛はゆっくりスローモーションで生きています。だから自然食品を選んだり、スローライフがいいということです

「そりかなあ。そんな能天氣なもんかなあ？」

速水が異を唱えた。

「蝸牛はカラの中に閉じこもつて居るでしょ。ニートとか引きこもりの子の哀しみを訴えてるんじゃないかな？」

それをきっかけにスローライフ派とニートの哀しみ派で大激論になつた。もちろん、どちらかが正しいという訳でなく、表現力や説得力を競うものなので、理想的な展開だった。

「古代中国人はね、蝸牛角上の戦いつて言つてね、蝸牛の角の上にもパラレルワールドがあると考えたの。道教の神秘思想なんです」

私も余計な雑談までしてしまった。

昼まで講座をやつてから、私は速水と前園を連れて、千種の街に出た。262円のお弁当を貰うと公園のベンチに座つた。私のおかげはチキンカツ。速水は肉じゃが。前園はカキフライ。

速水が前園にたずねる。

「前園先輩つて、家、法律事務所でしょ。継がなきやいけないって言われなかつたんですか？」

「言われませんでした。兄と姉がすでに司法試験に合格しているし、僕は闘争心が少ないので、弁護士に向いていないんですよ」

「いいなあ。俺は将来、医者にならなきやいけないです。レールの上を歩かされて」

「でも、速水くんは頭もいいし、優しいから、医者に向いてること思つけど」

「とりあえず医師免許をとつて、それから方向性を決めりゃあいいんですよ」

「本当、いいかげんだな、工口倉は・・・」

私も家の仕事を継いでないからな、と思つてると、佳彦が走つてきた。

「先生、たいへんです！財布がなくなつた！」

私は眉をひそめた。

「ちゃんと探したんですか？」

「カバンの中にはないです。自習室の場所とりに置いておいたらなくなつたの」

私は困つたことが起きたな、と思つた。私の勤めている予備校は外部からの侵入は出来ないようセキュリティのシステムがある。その分、内部で盗難が起こることは想定していなかつた。自習室の場所とりは財布でやつている子が多くつた。

とにかく急いでビルに戻る。ヒロくんとゆかりが困つていた。

「近藤先生、どうなつてるの？生徒に知らせた？」

「いや、今日の責任者の浅倉先生がいてはらへんかったんで呼びに行かせて、今、潤と智樹が佳彦の財布を探しています」

私は唇をかんだ。目をつぶつて、少し考える。自習室の廊下に自販機が並んでいる。そことのゴミ箱ー私は見当をつけないと、そこに向かつた。ゴミ箱のふたを開ける。

「あつーあつたー！」

佳彦が叫んで、財布を拾った。

「よかつた、カードある」

佳彦の財布には色々なポイントカードがあつた。私は動搖を抑えて言つた。

「現金は?」

佳彦は財布を調べた。

「ないです」

私の胸は早く鳴つた。

「いくらぐらいあつたの?」

「一千円ぐらいだから、大丈夫です」

「いや、大丈夫じゃないの。でも、とりあえず、あまり大きく言わないで。先生が解決するから」

佳彦は訳も分かっていないまま、うなずいていた。

私は自習室に入ると一回手を叩いた。

「皆、勉強中悪いけど、ちょっと聞いて下さい。ある生徒が場所と  
りに置いていた財布が紛失するという事件が起きました。財布、ケ  
ータイなど貴重品による場所とりはしばらく控えて下さい」

生徒たちがざわめく。

「今日は事務所がお休みなので、明日以降、詳しいことは連絡します」

そつ言い残して私は控え室に戻つた。須賀さんへの伝言メモを作る。  
胸はざわめいていた。

翌日、主な講師が集められ、今回の「JとDマーケティングをする」とことになつた。私、松浦先生、牛島先生、ヒロくんが参加。私とヒロくんが経緯を説明した。須賀さんは汗を拭いていた。

「困った。困った。うちは少数精銳でトラブルのないのが売りですからね。こんなじ時世だから自習室の見張りをやる手のすいた人もいないし」

私がいた日に起じたことで、私は仕方なく、発言した。

「とにかく注意喚起を生徒に促して・・・それしかないでしょう」

自分の言つていることが馬鹿馬鹿しくて、ムカムカした。その時に牛島先生が無神経なことを言つた。

「あのグレた子が危ないんじゃないの？」

私は怒りを抑えながら、反論した。

「速水は昨日、ずっと私と一緒にいました」

「でも、トイレとか席外したこともあるでしょ」

「それは・・・」

松浦先生が上手く間に入つた。

「まあ、生徒を疑っちゃいけませんよ。しばらく様子を見ましょ」

私は松浦先生につなぎいた。

その日は英語を教える日だつたが、教室にいても、自習室をのぞいても、生徒たちは財布の紛失事件のことをひそひそ話していた。そして速水を白い日で見る者は決して少なくないのだった。木曜日も金曜日もそつだつた。

金曜日の帰りがけ、野村も話しかけてきた。

「先生、聖イグナチウスの子が財布を盗まれたの、あの金髪が犯人なんじゃないかな？」

私は野村を叱つた。

「何か確証があるんですか！？」

「確証は俺が作る！お金に名前書いといったから」

「英治！よく覚えておきなさいー紙幣に何かを書き込むのは法にふれることです！そんなことせずに勉強にうち込んでいればいいの！」

英治は口をとがらせた。私は苛立つていた。

苛々しながら帰ると、リビングキッチンが勝手に模様替えされていた。母が勝手にやつたのだ。やらないでと言つてあるのに。私は寝間に入ると、布団に寝そべつて泣いた。  
いろんなものが自分の前に立ちふさがっているような気がした。

宝物をしまつているオルゴールの宝石箱を開ける。グアムで撮った家族写真。

私と両親と妹のまりあと　弟の佑亮。この日が浅倉家の幸福の絶頂だった。帰国直後に佑亮がバイク事故で亡くなり、私の家族はバ

ラバラになつたのだ。父と祖父母も失意のうちに亡くなり、母とま  
りあは険悪になつた。

私は写真にそつとキスした。

涙はあふれてきたが、急に強い思いがフツフツと湧いてきた。

速水を守らなきや。佑亮は守れなかつたけど。

そう思つた。

泣いて、泣いて、いつか眠つた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6709o/>

---

不良

2011年10月7日15時20分発行